

工学部に女子学生を増やしたい

男女共同参画担当副学長 船橋恵子

静岡大学は、平成 19 年度に男女共同参画憲章を定め、平成 20-22 年度文部科学省「女性研究者支援モデル育成事業」に採択されたことを弾みにして、男女共同参画に積極的に取り組んでいます。女性教育者(研究者)と女子学生を増やし、男女の教職員・学生のワークライフバランスを増進し、大学を生き生きと働き学ぶ場にすることを目標にしています。

その一環として、男女共同参画推進室では、昨年度から工学部広報企画室と連携して、8月初旬の工学部オープンキャンパスにおいて「女子高校生進学相談コーナー」を開設しています。オープンキャンパスに来てくれた全国の女子高校生に、静大工学部は女子学生を歓迎していることを知らせ、またロールモデルになる女性教員や女子大生と会って話す機会を持つことにより、女子の工学部進学にまつわる不安を解消し、できれば静大工学部の女子受験生を増やそうという狙いがあります。

昨年は場所が中心から外れていたため 10 名ほどの来談者でしたが、今年は受付近くの目立つところにテントを張ってもらい、30 名の女子高校生からの相談を受けました。女性の先生に出会えることに加えて、実際に憧れの静大工学部で学んでいる先輩女子学生と会って学生生活やあけぼの寮(留学生と女子学生を対象とした新築の寮)についてリアルな話が聞けたことが、大変良かったようです。実際に私から見ても、女性の先生方や女子在學生はカッコイイと感じました。テントのそばを通りかかる男子学生からも、多くのエールが送られました。「僕たちもたくさん女子学生に入ってきてほしい。大事にするよ」と。



ちなみに、過去 5 年間の工学部受験者における女子比率は、平成 19 年度 4%、20 年度 6%、21 年度 6%、22 年度 7%、23 年度 7%と上がってきています。合格者の女子比率も、19 年度 4%、20 年度 6%と上がってきましたが、過去 3 年は 6%で足踏みしています。女子高校生には是非がんばって公正な入試を突破してもらいたいものです。

他大学では、工学部の女子学生比率はどのくらいなのでしょう。全国一の工学部女子学生比率を誇る群馬大学では 18%、その高率を支えているのが応用化学・生物化学科だそうです(同学科の女子学生比率 37%)。一般に、建築、デザイン、都市環境、応用化学、生物工学などの専攻では、女子学生比率が高く、そのような専攻があると工学部全体の女子

学生比率は上がる傾向があります。残念ながら、静岡大学ではこのような女子に人気の高い諸専攻が、工学部にまだ十分に設置されているとは言えません。

今や全国の大学工学部で、女子学生を増やしたいと、新しい専攻を作ったり、食堂やトイレをおしゃれに改装したり、懸命な努力が行われています。国立大学 53 工学系学部長会議のリーダーのお一人である千葉大学の野口博教授は、次のように述べています。「大学での女子学生の活躍ぶりを見てみると、女性の細やかな感性や粘り強い研究姿勢、知的好奇心の強さに感心することがよくあります。実際、当学部の学部長表彰受賞者の 6~7 割が女子学生で、機械工学科や電気電子工学科でも女子の活躍がめざましいです。世の中の生活者の半分は女性ですから、これからは女性ならではの発想力や商品開発力、企画力が必ず求められます。リビングやキッチンで過ごす時間が長い女性のほうが、住まいの中の生活に密着した分野や消費者視点での新しいニーズに気づきやすい。オフィスひとつ例にとっても、バリアフリーやユニバーサルデザインのアイデアは女性から生まれやすい。」
(http://hapiteku.com/feature/archive/post_19.php)

なぜ、これほどまでに女子学生が注目されているのでしょうか。これからの時代に、工学部に女性が必要な理由は二つあるのではないかと思います。一つは男女平等の視点から、もう一つは男女の違いの視点から、説明できるでしょう。

第一に、今や工学もコンピュータを駆使して知恵を絞る科学ですから、体力が決定的とは言えず、適性には男も女もありません。幼い子どもは何にでも興味を示し、男の子が縫い物に熱中したり、女の子が科学実験に魅入られたりということは、よくあることです。もし大人たちが子どもを、男の子らしい遊び、女の子らしい遊びへと水路づけなければ、もっと多くの女子が医学、理学、工学系へと進んでいくのではないかと思います。世の中には男と女が半分ずついるのですから、どの分野にも半分ずつとまでは言わないまでも、ほとんどの分野に男女が層をなしているのが当然と考えられましょう。男子も女子も潜在的に持っている可能性を伸ばして、性別ステレオタイプにとらわれずに、ひとり一人の個性を開花していくことが望まれます。

第二に、女性の工学分野への参画は、従来男性によって発達してきた科学を女性の経験に基づく視点から豊かにするという考え方があります。先述の野口教授の話がそうですが、幼い頃から他者への気遣いをするように、またケアの担い手として社会化されてきた女性は、競争に打ち勝って他者や環境を支配することに差し向けられてきた男性と異なる視点や能力を持つ可能性があります。決して本来的に女性はやさしいとか、ケアがうまいという訳ではないのですが、そのように社会的に差し向けられてきた女性の特性が、科学をより人間的な方向へと軌道修正させていく可能性があります。その意味で、異文化の人々や異世代の人々が混じり合い、異質な視点を交わらせることが、新しいアイデアを生み出すと考えられています。このような考え方を、ダイバーシティと呼びます。

男女がともに、性別による偏見から自由になり、ダイバーシティに基づいて建設的な協力をするならば、学問も大学も真に発展していくでしょう。そのために男女共同参画が必要ですし、特に女性の少ない工学部にもっと女子学生を、そして女性教員を増やしたいものです。オープンキャンパスの他にも、今年から浜松キャンパスで、春休みと夏休み期間の学童保育を始めました。工学部の先生方による子ども科学教室などが好評です。

最後に、卒業生の皆様のご活躍を祈りあげますとともに、男女共同参画事業へのご理解とご支援をお願い申し上げます。